

*Petrichor*

— ペトリコール —

「雨が降る前は、水の匂いがするんだよ」

山中を走る一本道を往く傍ら、世間話の延長で率直に疑問を呈した私に、隣を歩く彼はこともなげにそう答えた。何度聞いても納得できない説明に露骨に眉を寄せれば、彼は困ったように眉を下げて笑う。苦味を帯びた、しかしどこか愉快そうに輝くその笑顔に、胸に収まる心の臓が普段より僅かに大きく収縮したのが分かった。

「空気が纏う気配ってどうか……ほら、春が近づくとこう、明るくて柔らかく匂いがするだろ？ それと同じさ」

やや前屈みになりこちらの顔を覗き込みながら同意を求めてくる。動作に合わせて、身体の前に摩訶不思議な風合いの長い髪が落ちかかった。暗色のそれは彼の纏う黄色の小袖によく映え、私の目を惹き付ける。

「匂いに明るいも柔らかいもないだろ」

艶やかな彼の髪から己が視線を引き剥がしながら、補足のつもりだったのだろう説明になおのこと首を傾げる。すると彼は、今度は小さく声を立てて可笑しそうに笑った。何故笑われたのかは分からなかったが、不思議と嫌な気持ちにはならなかった。それは彼が純粹に楽しそうだからかも知れない。そんなことを考えるでもなく考えつつ、朗らかな笑顔をただじっと見つめる。

彼は笑いを収めると呆れ混じりの溜め息をついた。次いで柔らかく細めた射干玉むべたまの瞳に瞬きの間だけ私を映し込んでから、唐突にその場で立ち止まる。

彼に従う格好で私も足を止めたが、彼は私に頓着することなく遠くそびえる山々を眺めている。その顔は湧水を湛える湖水がごとく澄み切っていた。先刻垣間見せた魅力的な笑顔など見る影もない。

「——これは一雨来るなあ。しかも雷交じりの激しいのが」

暫しの沈黙を経て、彼はすと鼻を動かすそう呟いた。

彼を真似て匂いを嗅いでみるも、これといって何も感じない。だがこれから、彼の言ったとおり雨が降るのだろうか。単なる経験則にすぎなかったが、私はそう認識した。

目の前に佇む彼はまったくの自然体だ。穏やかな気配も安い口調も普段となんら変わらない。だが己の知り得ぬものを理解しているらしい彼が神秘的な存在に見えた。確信の浮かぶその静かな横顔に何故だろうか、胸がいやにざわめいて焦燥が募る。

「すぐ止むと思うし、あの辺の岩場で雨宿りして行こう」

木々の隙間から覗く岩山をおもむろに指さすと、彼はすぐこちらに背を向け道を逸れて行こうとする。躊躇なく離れて

行く背中に、私は思わず手を伸ばしていた。彼の手首を掴むなりぐいと引き寄せる。

「わっ！……なに？」

「たたらを踏んだ彼が、体勢を立て直してから不思議そうにこちらを見た。だが反射的に取った行動だったため、私自身その問いに対する答えを持ってはいなかった。それでいて、捕まえた彼の腕を放すこともできなくて。

故に私はただ、彼の腕を掴む手にぐっと力を込めた。



「で、三郎は結局サークル決めたん？」

「ざわめきに満ちた大学構内のカフェテリア。その一角で、昼食を終え余った時間をだらだら過ごしていた不破三郎は、名指しの呼びかけにスマートフォンから顔を上げた。質問の主は向かいの席で同じく時間を潰している、入学式で隣に座って以来なんとなく行動を共にしている同級生だ。

脳内で反芻した彼の言に聞き覚えがある気がしてざっくりと記憶を辿った三郎は、数日前にも同じ質問をされていたこ

とをぼんやりと思い出した。

「前にも言ったけどさあ、特に入りたいとこないならオレの入ってるサークル入れよ。テニスサークルなんだけど」

「お前んとこはテニサーの皮を被った飲みサーだろうが」

「三郎の答えを待つことなくやはり聞き覚えのあるせりふを重ねた彼に、その傍らにいるもう一人が胡乱げに口を挟む。

その指摘が事実なら先の勧誘は詐欺に近い。だが詐欺もどきを働いた同輩は、悪びれる様子もなく頭の後ろで手を組んで吹き抜けになっっている高い天井を仰いだ。

「そーとも言いかもね。で、どう？ 三郎なら歓迎するぞ！」

「そこそこイケメンだし女の子釣れそう♡」

なるほど、それが狙いか。彼が熱心に勧誘してくる動機とその背景にあるらしい己が外見に対する微妙な評価の両方に心底呆れた三郎は、つい半眼になった。

「何だよその顔は!? 大事だろモテは！ 欲しいじゃん彼女!!」

「つい表情に出してしまった三郎の感想を見咎めて、おおよそ詐欺犯が勢いよくまくし立てる。だが率直過ぎる彼の物言いに、三郎は一層露骨に渋い顔をして見せた。

「賛同されなやか嘘だろう……？ ならさ!? 女の子が目的の飲みサーが嫌なら三郎は何サー入んだよ!？」

言葉返さずにいたところ慄いた様子で食い下がられた。

YESかNOでは答えられない問いを受け、三郎は軽い調子

で「うーん」とだけ唸った。はたから見れば思案している体だが、その実一切悩んでも考えていない。つまり同輩の面倒な追求を避けるための単なるポーズである。

「高校では部活何やってたんだ？」

ただの体裁でしかない反応を素直に受け取ったのだろう、先刻正確な情報をリークしてくれた同輩が助け船らしき問いを投げかけてくる。実際は考える気すらなかったのだ、彼の親切がありがたいはずもない。しかし鬱陶しいと思うこともなかった。なんせ今、三郎は暇なので。

「何も。オレんち転勤族だったからさ」

故に、ただ淡々と事実を述べた。

物心が付いた頃には、三郎は両親と共に各地を転々とする生活をしてきた。一般的な転勤族の家庭がどうなのかは知らないが、不破家の場合一ヶ所に留まるのは長くても二年ほどだった。しかも事前に滞在期間が定まっていることはあまりなく、突然引越しが決まることも少なくなかった。

故に入部しても仕方がないと思っていたのだ、どうせそう遠くない未来に別れることが決まっているのだから。そんな己の現実を悲観したこともなかったが、そもそも興味のあるスポーツや活動も特になく、新たな人間関係を構築する方が面倒だと考えていたため何の感慨もなかった。

「ふ〜んそ〜なんだ、じゃあ休みの日とかは何してんの？」

なんかはあるだろ？ 趣味とか、熱中していることとかさ〜」  
勧誘に失敗したと判断したのか、自称テニサー所属の同輩がやる気のない声で尋ねてくる。考えたこともなかったその問いに、三郎は素直に自身を振り返ってみることにした。

都内にキャンパスを構えるこの大学に入学してからの三郎の生活は、ほぼ講義とアルバイトで構成されていた。東京は物価が高く、ただ生活するだけでもなかなか金がかかるのだ。両親から仕送りを貰ってはいるが、授業料と光熱水費で八割方消えてしまうためそう余裕はない。歳の離れた兄二人が早々に独立し一人っ子同然に育てられた三郎が貧乏学生の節約生活に甘んじていられるはずもなく、生活費や交際費のためにバイトをするのは当然の選択だった。

加えて、三郎は積極的に貯金したいと思っていた。現時点でもそれなりに貯めてはいるが、金は天下の回り物だ。多いに越したことはない。

そういった理由から、意欲的にシフトに入っているのは確かだ。しかし熱中しているのかと言うとそんな感覚はなく、増えゆく通帳の残高を眺めて悦に入ることもない。ただ空き時間を有意義に使っているという以上のことはないのだ。

ならば高校生の頃はどうかだろうかと記憶を手繰る。當時を振り返ると、三郎は余暇の大半を勉強とバイトに充てていた。東京の大学に進学し一人暮らしをするという目標に

向け、勉学に励む傍ら資金調達に励んでいたのだ。つまり今と大して変わらない生活を送っていたと言える。

そこでふと、今日は早めに来て欲しいとバイト先から依頼されていたことを思い出した。三郎がいつも入っているシフトの一つ前の時間帯で人員調整が付かなかつたらしく、可能な範囲で早く出勤して欲しいと言われていたのだ。働いた分給料に色をつけてくれると聞いているし、次の講義は温厚な教授が担当する評価のゆるい講義であるためサボっても問題ないだろう。即断即決、三郎はスマートフォンをポケットに突っ込むと荷物を持って席を立った。

「今日バイトだったの忘れてた。三限の代返頼むな」

サボる講義のフォローを一方的に依頼すると、三郎は同輩たちの返事を待つことなくカフェテリアを後にした。

可能な範囲でと言われている以上、無理に急ぐ必要はない。故に三郎は自分のペースで正門へと向かう傍ら、先刻の考えごとに今一度沈み込んだ。

趣味や熱中していることが何一つ浮かばない自分がひどく薄っぺらい人間に思えてならなかった。何よりそれは、次に待ち受けているライフイベントたる就職活動でよく訊かれる質問のほずである。答えられないまま放つておいては、後々

困ることになるだろう。故に三郎は、やや必死になって何かないかと記憶を片っ端からひっくり返した。

幼少期のことはさすがに思い出せない。大体あったとしても昔過ぎて就職活動で答えられはしないだろう。割愛する。

小学生の時はクラブ活動を参加必須としている学校が多く煩わしく思っていたことしか記憶にない。避けられない場合は楽そうなクラブを選び、目を付けられない範囲でサボっていた。中学生になって部活に変わると大半の学校が参加任意となり清々したのを覚えている。つまり三郎が何らかの活動に熱心に参加したことは一度もなかったらしい。

——ああでも、そういえば。

ふと、脳裡を掠めた朧な記憶に三郎は意識を向けた。

一時期、気象関連の本を読み漁っていたことがあった気がする。わざわざ図書館にも通っていたくらいで、やたらと熱が入っていたのは間違いなかった。だがいくら思い出そうとしても、いつ頃のことか何故だったのかは思い出せない。

思いつくのはそれくらいだった。しかし夢中になっていた理由は不明な上に、今の三郎には特別思い入れも興味もない。ならこれから熱中できることを探すべきかと考えるも、飲みサーは当然として他に興味を惹かれるサークルや活動も特になかった。一応力を入れているバイト関連で答えられることを探す方が建設的なように思える。

そこでふと三郎は視線を上げた。思案しつつ歩いている内に正門付近までやってきていたらしく、キャンパス内外を行き交う数多の人々が視界に入る。その中で、前方から歩いてくる特に珍しくもない男子学生のグループになんとなく目が吸い寄せられた。一人一人に何気なく視線を移していくと、ある青年を視界に留めた瞬間、三郎は雷に打たれたかのような強烈な衝撃を受けた。目が彼に釘付けになる。

「……ッ!? お前!!」

思わず大声を出した三郎に、問題の青年がグループの男子学生たちと同時にこちらを見た。目が合った瞬間、彼もまた驚いたように目を見開く。

同時に、三郎の脳裏には先ほど思い出せずにいた、既に臆になってしまっていた過去——熱心に気象の本を読み漁っていた頃の記憶が鮮明に蘇ってきていた。

あれはそう、中学最後の年だった。既に半分が行き過ぎて上着なしで外を歩くのが辛くなってきた時期の、半年にも満たない期間のこと。珍しくも、三郎が悔しさを覚え果敢に挑戦をし続けた記憶だった。



その日三郎は一人バスに揺られていた。どれほど進もうと、車窓から見えるのは収穫を終え渴いた水田ばかりで面白みの欠片もない。見慣れない退屈なその光景は、ここ一ヶ月の間三郎の胸に鬱積し続けている不満をさらに増幅させていた。

一ヶ月、それは三郎がこの町で過ごした期間である。つまり三郎はまだ越してきたばかりであり、この土地に馴染めていなければ親しい者もない状態と言える。だが慣れない土地、慣れない環境が不満の原因ではなかった。親の都合で幼い頃から各地を転々としてきた身だ、引越しや転校など最早慣れたものである。

加えて三郎は、自慢ではないが要領はいい方で勉強も運動も人付き合いさえ卒なくこなせる能があった。そして転入生という存在には、老若問わず大抵の人は親切なものである。故に友人を作らずとも学校生活で不自由することはほとんどなく、だからこそ必要性も欲求も感じなかった。実際およそ一年半を過ごした前の町でも、クラスメイト以上に深く付き合った者はいなかった。三郎にとっては、年に数回祖母の家で会える一つ歳上の従兄弟がいれば十分だったため、労して友人を作る気がなかったのだ。

転居の頻度や引越し自体が不満の原因ではないのなら、一体何が不満なのか。それはすばり、この町そのものだった。なんせこは、見てのとおり延々田畑が広がっているようなド田舎なのである。

東京や大阪などの都市とは異なり、この町ではどこへ行くにもなんらかの交通手段が必要だ。するとまだ中学生である三郎の行動は自然と制限されてしまうのだった。

しかも現在暮らしている社宅の周辺には、驚くべきことにコンビニどころか自動販売機すらなかった。閑静な住宅街といえば聞こえはいいが家が建っているのは全体の半分かそれ以下。つまり空き地だらけなのだ。家から最も近い商業施設であるスーパーには車で十分ほどかかるし、日用品や消耗品以外の購入には車で三十分はかかる中心街へ出なければ用が足りない。一応バスが出てはいるのだが、車社会故に一時間に一本しか走っておらず、さらに最寄りのバス停まで自転車で二十分もかかる。これまで都会を転々とし便利な暮らしに慣れていた三郎には我慢できない環境だった。

今三郎がバスに乗っているのは、休日出勤中の父に忘れ物を届けに行つて来たからだ。休みの日は昼まで惰眠を貪っていたのに、早々に叩き起こされた上にあれこれ乗り継いで行かねばならなかったのだ。母には逆らえないが不機嫌にもなろう。職場自体は中心街にあるのに社宅をこんな辺鄙なと

ころにするとかどういう見だ、と恨みがましい気分になる。もちろん、金銭面等の現実的な都合があつてのことだろうという想像はついているが。

やがてバスは見覚えのある区画に入り、そのまま見知ったバス停の前で停車した。三郎は乗客のまばらな車内を進むと、じゃらじゃらと音を立て料金箱へ小銭を放り込んだ。毎度のことながら今時電子マネーに対応していないなんて信じられないと思いつつ、運賃に不足がないことを確認してから運転手に会釈をしバスを降りる。

土曜の昼過ぎなんて時間帯のためか同じバス停で降車する人はいなかった。故に三郎が地面に足を着け一步離れるのとはぼ同時にドアが閉まり、バスがゆっくりと動き出す。

無駄に長く面倒な旅路も残り僅かだ。あとは自転車で家に帰るだけである。三郎はため息をひとつとつくと行きに自転車停めた場所へと足を向けた。単なる空き地で駐輪場と呼べるような設備ではないが、料金がかからず撤去される心配もない点だけは評価できる。

「ねえ、その君！」

その時、唐突な呼び声が耳に届いた。自分のことかも定かではない曖昧な呼びかけだ。いつもなら無視していただろう

その声に、しかし気がつけば三郎は自然と振り返っていた。

見ればバス停の後方、空き地に建つ待合用のプレハブの窓から少年が手を振っている。束感の強い不可思議な髪を持つ彼が振りまわす手には、何故か棒付きキャンディが握られていた。学ランの下にパーカーを着込んだいでたちからして、中学生か高校生か——どちらにせよさほど歳は変わらないだろう。プレハブ自体が少し引つ込んだ場所にあるため、表情を読み取るのはやや難しい。彼がしたのと同様に声を張れば当然届くだろうが、会話をするには少々遠かった。

仕方なく、踵を返して距離を詰める。近づいてみると顔が丸っこいパーツで構成されているためか、彼は想像していたよりも幼く見えた。中学一年生くらいだろうか。

「オレになんか用？」  
そんなことを考えながら、つつけんどんな物言いだ尋ねる。対して少年は、ただ人懐こい笑みを浮かべ頷いた。

「うん。ねえ君、傘持ってる？」  
「……はあ？」

少年の質問の意図が理解できず、つい横柄な口調で問い返してしまった。だが彼は三郎の態度を気にした様子もなく、変わらず柔和な笑みを湛えている。

「持ってるなら常光寺まで入れて貰おうと思ってる。あそこ傘借りられるだろう？ 杭瀬方面に行くなら通るじゃん」

続いて為された説明は、しかし三郎を一層困惑させるだけだった。クイセなる地名？ はもちろん傘を貸してくれる寺なんぞ知らないし、思わず仰ぎ見た空はよく晴れていて雨が降ってくる兆しなどどこにも見当たらない。

——妙な輩に絡まれてしまった。  
「持ってない」

三郎は辟易した気分を彼に聞こえないようごく小さく吐き出してから簡潔に答えると同時に踵を返した。そのまま己が自転車の方へ足早に向かう。変質者と遭遇したらまず距離を取り、なるべく関わらずに済むよう努めるのが定石だ。彼の言葉に三郎の知る単語は一つもなかったのだ、行き先も違おうだろう。まったく、今日は朝から災難続きである。

「そっか、残念だなあ。——あれ、君自転車だったんだ？ なら傘じゃなくてカッパかあ」

だが急ぎ移動した甲斐もなく、少年はわざわざプレハブを出て追いかけて来た。三郎は移動手段を把握されてしまったことを不愉快に思いつつも、彼を無視して乱暴にスタンドを外した。自転車を押しながら道路へ向かう。土と雑草で足元がふかふかしているせいで、タイヤが引つかかりスムーズに前進しないことに淡く苛立ちを覚える。



「雨具がないなら君も暫くここにいた方がいいよ。この寒いのに降られたら風邪ひいちゃうだろ」

少年は三郎の後ろをついて歩きながらさも親切そうに言い論してきた。無視されたことに気づいていないのか気を悪くした様子もなく、未だに意味不明のことを言い続けている。のれんに腕押し状況に、苛立ちがじわじわと募りゆく。

「馬鹿言え、こんなに晴れてて雨なんか降るわけないだろ」  
「これから降るんだって」

無視を貫き通せずい声を荒げてしまった三郎を、少年はのんびりといなした。その『やれやれ』とでも言わんばかりの口ぶりが、既にひりついていた三郎の神経を逆撫でする。再び彼を無視することに決めた三郎は、舗装された道路に出るなり自転車に跨がった。躊躇うことなくペダルを踏み込む。

「あーあ、知らないからなあ〜」  
背後から聞こえてくる呆れた声を振り切るように、三郎は全速力で自転車を漕ぎ出した。

だが残念なことに、三郎の災難はむしろここからが本番だった。無情にも、それから五分も経たない内ににわか暗雲が広がり雨が降り始めたのだ。なお悪いことに、雨足はすぐに激しくなり視界を遮るほどの豪雨にまでなってしまった。雨の備えなどない三郎は当然、一瞬で全身ずぶ濡れである。

どこかで雨宿りをすべきだ。そう判断するも、辺りは見渡す限りの田畑地帯で雨を凌げるような構造物はない。田畑の先は家のまばらな住宅地に入るため、進路上に屋根を借りられそうな場所の心当たりもなかった。つまり現在地から最も近い屋根のある場所は件のプレハブしかないのである。だが少年の忠告を振り切る形で出てきた己がどの面下げて戻れると言うのか。ちくしょう田舎！三郎は心中で雑に毒づいた。

結局、プライドを優先させ豪雨の中帰宅を強行した三郎は、その晩見事に大風邪を引いて高熱を出した。

『これから降るんだって』

『あーあ、知らないからなあ〜』

熱に苦しむ三郎の脳裡で繰り返し再生され続ける、呆れたような、諦めたような声。三郎は寝込んでいる間ずっと、その日遭遇した妙な少年の幻に苛さいなまれ続けたのだった。

それから二週間ほど経ち、風邪もすっかり治った頃。

「あれ、この前の！風邪はもう治ったんだ？」

ある休日の夕暮れ時。聞き覚えのある声音に親しげに呼びかけられた三郎はつい、思いつき顔をしかめた。中心街で買い物をした帰り、いつぞやと同様にバスを降りたところ

声を掛けられたのだ。声の主が誰かなど考えずとも分かる。思い出したくもない、いろいろな意味で最悪だった記憶に登場する主要人物である。

だが三郎の渋すぎる表情はどちらかという少年<sup>悪夢</sup>と再会した事実の方ではなく、先ほど彼が発した言葉に起因していた。なんせその物言いからして彼は、あの日三郎が当然雨に降られて風邪を引いたものと思っただけなのだ。実際がどうだったかなど、彼が知り得るはずもないというのに！

……だが実際のところ、三郎は風邪をひいて寝込んでいた。つまり彼の認識は誤っていないのである。故に三郎は据わりの悪さや不愉快さを消化できずにいながらも、発しかけていた怒号をどうにか呑み込んだ。非を認めず当たり散らすなど子どものすることだと内心で己を嗜める。その上で、中心に渦巻いている荒ぶる感情の発散も兼ね、勢いよく身を翻すと一歩一歩を踏み締めながら少年の下へと向かった。

窓下に至る頃には行き場のない羞恥や不満も落ち着いて、三郎は今更のように気まずさを覚えていた。どうすべきかや悩み、顔を伏せたまま立ち尽くす。しかし状況が変わる気配はない。いつまでもそうしているわけにもいかないと、三郎は意を決して恐る恐る顔を上げた。

少年は窓縁に頬杖をつけてこちらを眺めていた。その顔に浮かべられているのは、邪険にされた過去などなかったかの

ような親しげな微笑である。さらに彼は、三郎と目があった途端濃色の丸い瞳を嬉しそうに和ませたのだ。想定外に友好的な反応にむしろ一層の居心地の悪さを覚えた三郎は、慌てて彼から目を逸らした。

「……なんで雨になるって分かったんだ？」

視線を逸らしたまま、ややぶつきらぼうな口調になりつつ彼が雨を予言した根拠を尋ねてみる。それは三郎がどうにかひねり出した落としどころだった。

すべてが彼の言うとおりに上に友好的に迎えられてなお、反抗的な態度を取れるほど子どもではない。だが己の過ちを認め当時の態度を素直に謝罪できるような度量もなかった。それ故の苦肉の策だったのだ。三郎が怪訝に思うほどの確信を持つていたこと、実際予言どおりになったことを鑑みると彼にとっては難しい質問ではなからう。あわよくばその知恵だか知識だかを今後の参考にしたい、という淡い期待も込められている。もう二度と、何もない田舎道で進退窮ま<sup>ま</sup>って濡れ鼠になる状況に陥りたくない。

だが想像とは異なり、答えはなかなか返ってこなかった。思惑が外れた三郎が様子を窺うべく視線を戻すと、丸い目を瞬かせ呆気にとられた様子の彼にじっと見つめられていた。

思わぬ反応に三郎は困惑した。あの日少年の忠告を頑なに拒絶した癖に、手のひらを返したのは事実ではある。しかし

實際雨に降られた以上、彼の発言の正当性を認めるのは自然の流れではないか。先日自身が取った態度を謝罪せぬまま有耶無耶にしようと目論んでいるだけで、そこまで驚嘆されるようなことは無いはずだ。

——いや、もしかして謝罪もせずに有耶無耶にしようとしていることに引いているのか？

考えを巡らせる中で行き当たった一つの可能性に、羞恥が急騰し顔が熱くなる。いたたまれなさに耐えきれなくなつた三郎は、再び地面へと視線を落とした。足元に転がっている小石を爪先で弄び、気を紛らわせようと試みる。

だが三郎が激しい羞恥を静め切つてなお、少年が発言する気配はない。三郎は頭を悩ませた。会話はキャッチボールだ、彼が言葉を返してくれなければ成立しない。かと言つて唐突に質問を取り下げるのも不自然に思えた。己が家庭が転勤族であることを言い訳に同級生たちとの親交を避けてきた三郎には、こんな時どうすればいいのか皆目見当がつかなかった。悩んだ末に腹を括つた三郎は再び顔を上げた。彼の丸い瞳を正面からじつと見据え、彼の答えを待とうというのである。そのまま対峙していると、次第に少年の顔から力が抜けていった。やがて完全なる真顔に戻つた彼は、三郎を真っ直ぐに見つめ返したままようやく口を開いた。

「——雨の匂いがしてたから」

「……あ、雨の匂いだよ？」

待ちわびた返答に、しかし三郎はつい間髪入れずにおうむ返しに問うていた。ようやく投げ返されたボールが明後日の方向に飛んでいったのだ、そんな反応にもなる。素っ頓狂な声をあげてしまったからか、少年は丸い目を瞬いている。「するだろ。なんてーか……空気に染み込んだ水の匂い？ みたいなのがさ」

次いで、さも当たり前のことかのように続ける。その妙に詩的な表現と小首を傾げる彼の仕草、きよんとした表情に何故だか三郎は無性に苛立つた。

「分からん。田舎モン独特の能力か？」

「田舎モンで……失礼だなあ。そう言う君は都会っ子なの？」  
苛立ちを胸の内に留めきれずつい煽るような態度を取つた三郎に、しかし少年はやや呆れた風に苦笑しただけだった。怒りもせずに穏やかに問い返され、ばつの悪さを覚える。

「……東京出身だからな」

質問への返答代わりに出身地を答え、三郎はやや得意気に胸を張つた。東京出身という肩書きは都会派の三郎にとつて誇らしいステータスであるため、気を取り直すことができたのだ。嘘ではない。長期間同じ地域に住んだことこそないが、生まれた病院の所在地も、トータルで一番長く暮らした地域も、この町に来る前の居住地も東京である。

地方都市では、転入先で東京出身と言うと羨望の目を向けられ質問攻めにあつたり疎ましがられたりする。先日中学校で自己紹介した時も同じ反応、いや今までで一番田舎であるが故か今までで一番顕著だった。そんな彼らの態度に優越感を覚えたほどだった。この町に来て唯一嬉しかったことと言つても過言ではないくらいに。

しかし目の前の少年は、彼らのように瞳を輝かせることもなければ余所者を疎ましがむ様子もなかった。ただ納得したように何度も小さく頷いている。

「なるほど。どーりで見ない顔だと思つたわけだわ。おれ、尾浜勘右衛門。中三。君は？」

「中三？ タメじやん。オレは不破三郎だ」

東京という地名に反応しなかつた同年代は初めてで拍子抜けした三郎だったが、続いてなされた自己紹介に目を丸くした。同い歳だとは正直思つていなかつたため、謎の苛立ちやばつの悪さも忘れて食いつき名乗り返す。思いがけない共通点に何故かは分からないが、微かな喜びを覚えていた。

しかし。

「えっ、嘘だあ！ 絶対歳下だと思つたのにー！」

直後、勘右衛門と名乗つた少年が三郎が思つていたこととまったく同じことを叫んだ。それがこれまでで一番大きい声だったため、至近にいた三郎は反射的に耳を塞いだ。当然、

淡く覚えていた喜びも跡形もなく吹っ飛ばされている。

——気にしてることを！

三郎は内心で吠えた。大変遺憾ながら実年齢より幼く見られることが昔から多く、故に大変不本意ながら経験が豊富な三郎は、勘右衛門のストレートに失礼な発言にも素晴らしい瞬発力で反感を覚えた。

「そりや何か？ オレがチビだつて言いたいのか？ それとも精神がガキくさいとでも？」

「いやなんとなくそうかな、つて思つてただけだよ。そんな怒るなよ……、若く見られてハッピー☆とでも思つとけよ」

畳み掛けるようにネチネチ問い質せば、彼は動物を御するかのように両手を上下させた。面倒そうな気配を隠しもしないその顔にはしかし負の感情は見当たらず、むしろ楽しんでるようにさえ見えた。そんな勘右衛門に三郎は何故だろうか、苛立つこともなく奇妙なくすぐつたさを覚える。

「そう言つて喜んでんのオッサンオバサンだけだろ！」

燦る不満と謎のこそばゆさを誤魔化すようにそう喚けば、彼はいたく愉快そうに笑い声をあげたのだった。

同い歳であるにもかかわらず互いに存在を知らなかつたのは、勘右衛門が三郎とは違う中学校の生徒であるからだだった。学区がまったく違うのだ、当然日常的に彼との接点はない。